

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520333

研究課題名(和文) 清朝の言語政策と社会変動に係わる漢語の多層性に関する研究
- 公用語の脈流を視座に -研究課題名(英文) A Research on the strata of Chinese Related to Language Policy and
Social Change in Qing Dynasty研究代表者 藤田 益子 (FUJITA ITSUKO)
新潟大学・国際センター・准教授

研究者番号：研究者番号：10284621

研究成果の概要(和文):

中国の17世紀から20世紀初期の満洲族統治下における民族、階級、地域間の言語交錯と公用語の関係を調査し、内包する公用語の脈流を視座に、清朝の言語政策及び社会変動に係わる漢語の多層性について検証した。清代における社会的動向と言語の関係について、(1)「少数民族による多数派民族の支配、共生」と「満洲族による支配という特殊状況下での漢語への影響」、(2)「満洲族の華化」と「公用語への指向性」、(3)「外交交渉のための公用語の必要性」と「南京官話・北京官話の対峙」、(4)「政治制度に関わる特殊な階層」と「階級方言の成熟及び通用化」、(5)「清朝の政治的統治力の盛衰」と「言語の関係」という5つの観点から分析を行った。

研究成果の概要(英文):

This paper researched the relation between a common language and language crossing, which exist between nations, classes and regions to verify multilevel nature the Chinese language related to Qing's language policy and social change from the view point of streams of a common language under the rule of the Manchurian. It is during 17th century to the beginning of 20th century. In this research, analysis was carried out from following five view points: 1) "rule by ethnic minorities to majorities and co-existence between both ethnic group", and "the influence to Chinese language under the specific situation, that is, rule by the Manchurian"; 2) "Sinicization(Hanization) of the Manchurian" and "the request to a common language"; 3) "necessity of a common language for diplomatic negotiation" and "confrontation between Nanjing Mandarin and Beijing Mandarin"; 4) "Specific classes related to political institutions" and "Ruling class dialect which matured and be popularized"; 5) "Raise and fall of governing ability of Qing dynasty" and "its' relation to language".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	900,000	270,000	1,170,000
20年度	800,000	240,000	1,040,000
21年度	800,000	240,000	1,040,000
22年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：漢語・公用語・官話・満洲語・旗人語・白話・階級方言・言語政策

1. 研究開始当初の背景

従来の研究では、北京語を基軸に近代から現代への中国語の語彙の変遷を辿り、変化と要因との関係を考察してきた。具体的には、次の四つの方向から研究を進めてきた。

一. 現代北京語：現地調査と文献資料の両面から、北京語語彙や語義の調査を行い、近代以降、現在までの約百年間の北京語を収集し変化を把握した。

二. 近代北京語：近代漢語にまで時代を遡り調査をした。その際、『儿女英雄傳』等の北京語で書かれた白話小説資料を中心にデータを収集し、現代北京語への繋がりを調査した。

三. 方言：北京語の歴史的変遷に対し方言地理学的な考察を加えた。他方言で書かれた白話小説資料との比較により、北京語の姿を浮き彫りにすることを目標とした。

四. 社会と文化背景：北京語と社会、文化等各時代背景との関連性を考察した。

その結果、現代中国語の礎となった近代漢語における北京語の変遷について、漢語史の観点から文法事項や語彙を収集し、分析を行なうことが出来た。更に、近現代の中国の言語を取り巻く環境は、社会体制の変革、方言の流動、文化的変貌等、複雑で激しい社会変化の影響を強く受けていることも明らかになってきた。これまでの研究を進める課程で、一般に北京語と称される言語の深部には来源の異なるいくつかの系統性を持った言語の脈流が存在し、時に平衡し、時に交錯しながら現代に至る様相が見えてきた。現代の中国の公用語は、普通話という規定に則り人為的に整備された言葉であるが、その原形の一部を成す清代の北京語は単純な一方言ではなく、北京に存在する様々な要素が複雑に絡み合いながら、柔軟性を具えた巨大な集合体を形成していた。この背景となった複雑な言語環境の存在故に、清代には幾度も言語政策が講じられ、政治的意向と社会的動向の絡んだ公用語の模索が続くことになる。最終的には、清末に外交交渉という外的必然性から方向性が決定され、北京官話が公用語としての地位を確立することとなったのである。

2. 研究の目的

清朝は満洲族による支配であったため、漢語の流れに対して、従来とは全く異なる民族性、地域性、政治体制が複雑な影響を及ぼした。これらの要素に起因する言葉の脈流は具

体的にはどのような語彙体系を成し、漢語史の中で、いつ、どこで、どのように形成され、盛衰していったのかを考察する。

「清代の言語政策に係る言語」及び「社会的動向と主要言語の移行」の関連性を整理すると、政策、言語、社会の3つの方向性から、それぞれ次のような4つの要素が絞り込まれた。

(1)言語政策については、

二重言語政策

公用語への指向

公用語としての対峙

階級方言の通用化

というプロセスを辿る事になる。

(2)言葉の脈流としては、

・満洲語の漢語への影響

・正音

・南京官話・北京官話

・旗人語

等の存在が示唆される。

(3)背景の社会的動向としては、

(ア)少数派民族の多数派支配による共生

(イ)満洲族の華化

(ウ)外交交渉のための公用語の必要性

(エ)政治制度に関わる特殊階層

等の問題が考えられる。

そこで満漢合璧資料、満洲語を多く使用した資料、欧文官話資料、旗人による白話小説資料などの関係資料等から語彙・文法事項を収集し、比較対照することにより、語彙の盛衰に関する語彙レベルでの対立や共存の現象について観察することが可能となり、同時に相対的な脈流の実態を把握することも可能になると考える。

以上の方法から、17世紀から20世紀初期の満洲族統治下における民族、階級、地域間の言語交錯と公用語の関係を調査し、内包する脈流を視座に、清朝の言語政策及び社会変動に係わる漢語の多層性について明確にすることを目標とする。

3. 研究の方法

上記に整理した社会的動向と言語の関係によって、五つの段階に分類し研究を進めた。第一段階：「少数派民族の多数派支配による共生」と「満洲族支配という特殊状況下の漢語への影響」。

満洲語と周辺方言の漢語語彙への侵入状況を検証するため、満漢合璧資料を基に、漢語資料と対比することにより、「特に北方方

言や北京語に入り込んでいる満洲語」や「満洲語の影響を受けた漢語語彙」等の整理を行ない漢語への影響の考察を行った。

手順と方法

満洲語と漢語の合璧資料に基づく文法、語彙の歴史的变化を整理した。北京語で書かれた白話小説の語彙と対比することで相違のある特有の表現を選出した。

第二段階：「満洲族の華化」と「公用語への指向性」。

共通語を教育するようなシステムが無かったため、雍正六年に上諭によって、福建省諸県の「正音書院」設立や、広東省の「粵秀書院」等の書院の支援が行なわれ、教科書として『正音撰要』、『正音咀華』等も編纂された。ただし、清代の正音書は旗人の手によるものが多く、例えば、『正音辨微』道光十七年刊本や『正音咀華』咸豐癸丑刊本を編纂した莎彝尊も旗人である。そのため、語彙分析に際しては、第四段階での旗人語の研究と合わせて検証する必要がある。

手順と方法

正音の語彙の性質を体系的に考察する。これまでに収集した北京土語、北方方言等の口語データとの対比も行い、その性質の焙り出しを図った。

第三段階：「外交交渉のための公用語の必要性」と「南京官話・北京官話の対峙」。

清代の官話における欧文資料の他、北京と南京の語彙を併記した九江書會『官話指南』、『官話類篇』等を活用し、南京と北京の官話を対照した。また、南・北官話の特徴的な語彙の選定を目指した。欧文資料は「文言白話混淆体」に注意し口語を中心に進めた。

手順と方法

『語言自邇集』の如く底本の経過が迎れる資料は底本と版本間の語彙対照表も作成した。更に特徴的な基準となる語彙の選定を試みた。同系資料の書き換えに拠って主要言語の変遷に添った変化が解明された。

第四段階：「政治制度に関わる特殊な階層」と「階級方言の成熟及び通用化」。

旗人語とは、旗人の階級的方言を指し、満洲語と漢語の両方、或いは相互に影響を受けた言葉が含まれる。明代に河北方言が満洲の地帯に伝わり、清朝になって旗人が北京に古い言葉を逆輸入したとの指摘もある。

手順と方法

これまでの満洲語の影響を受けたとみられる漢語、旗人語、官話の語彙・意味・用法の面で収集したデータを対照し、総合的検討を行い相互関係を整理する。収集した内容も漢語の言語資料としてデータベース化する。

第五段階：「清朝の政治的統治力の盛衰」と「言語の関係」。

清朝の融和政策と隔離政策は、漢語と満洲語に如何に作用し、最終的にはどう漢民族文化に飲み込まれていくことになるのか。そして全てを内包した漢語は、如何なる多層性を持った言語になったのか。漢語史上、清朝政府の存在と変容はどのような意義を持つのか。背景にある社会制度、特に言語政策や教育制度をつぶさに調べ、漢語との相互関係や具体的な言語現象にどのような影響を与えたのかを分析した。

手順と方法

漢語が内包する脈流に沿ってデータを整理する。『大清会典』等から、歴史上の言語政策の道筋を確認する。総括として清朝の政治的統治力の盛衰と言語の関係について考察を行った。

4. 研究成果

(1) 第一段階として、「少数派民族の多数派支配による共生」と「満洲族支配という特殊状況下での漢語への影響」というテーマを中心に考察を進めた。満洲語と周辺方言の漢語語彙への侵入状況を検証した。清朝成立後、内城に旗人が入りその言葉が基準となった。そのため明代の北京語に対して断層を持ち、河北方言の影響や古い形を持つとの指摘もある。実際に明代と清代の資料を比較すると、清代の資料に忽然と現れ北京語として頻繁に使用されている語彙も確認された。更に漢語の中でも北京方言は大量の満洲語語彙を吸収している。

(2) 第二段階として、「満洲族の華化」と「公用語への指向性」に関わる問題に取り組んだ。

正音は、雍正期、福建語・広東語の話者を対象とした公用語教育のためのもので、音注は南音、語彙は北という説もあるが、いずれも南京のものであるという説もあり、語彙に関する実態は不明である。そこで正音の語彙を整理し、これまでの研究で蓄積した北京語語彙と第三段階で行なう南・北官話との比較対照を通してその実態を解明に努めた。

(3) 第三段階として、「外交交渉のための公用語の必要性」と「南京官話・北京官話の対峙」に関わる問題について考察を進めた。南京と北京の官話の対照作業を中心に行った。目的は、南・北官話の特徴的な語彙の選定である。明末清初、外国からは南京官話が規範と見られていたが、アヘン戦争以降、外交交渉において北京官話が必要となり主流が北京官話へと移行する。この欧文官話資料の性質の違いを活用した対照研究を試みた。正音を官話と等しく見る考え方もあるが、「正音の語彙

=官話」と結論付けることは出来ず、更に検討の必要性がある。また、『語言自邇集』『談論編』は、『清文指要』が元になったもので、更に同じ系統の版本として、『初学指南』『三合語録』等も存在しているため、欧文官話資料と清文系資料との比較対照に拠って、北京官話資料と満漢合璧資料との相違を検証した。

(4)第四段階として、「政治制度に関わる特殊な階層」と「階級方言の成熟及び通用化」に関わる問題について考察を進めた。

親族呼称等は現代漢語でも使用されるが、旗人語に関する研究は現段階では少なく、語彙の特殊なものは確認されなかった。また、時代毎の満・漢語の文法・語彙の均衡や実態について調査を行った。

(5)第五段階として、「清朝の政治的統治力の盛衰」と「言語の関係」に関わる問題について考察を進めた。

研究全体の最終年度は、これまでの言語学の領域を超え、政治制度と政策的言語統制に関わる広い視野に立って、複合的な漢語通時研究を行うための基本構造を考察した。

更に、清代も時代が下ると政治制度に関わる特殊な階層の言語である旗人の用いる言語に成熟が見られた。白話文学は、清朝末期から民国初期にかけて発展したが、白話文学作品の中には、高度な言語能力を持つ旗人の手によるものが少なくない。近現代の白話小説に源流を求める現代の普通話の語彙にとっては、そこに含まれる旗人の用いた言語の研究は重要なものと位置づけられる。これらの言語には、北京方言とも異なる様々な要素を含まれており、満洲語の影響以外にも、明代漢語の南京方言や華北方言の語彙、金代の女真語、元代蒙古語からの借用語、清代東北の漢語方言の影響が見られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

藤田益子、清代の旗人・満洲族に関わる語句について 『兒女英雄伝』からの考察 『国際センター紀要』、第7号、20-60頁、2011年、査読有

藤田益子、“把”構文における賓語の性質と量詞の機能について 『兒女英雄伝』を中心とした“把+個+N+Vp”構文の認知に関する考察、『新潟大学国際センター紀要』、第6号、18-73頁、2010年、査読無

藤田益子、『兒女英雄伝』における“被”

構文 『敦煌変文』、『紅樓夢』との対照に拠る考察、『環日本海研究年報』、第16号、76-106頁、2009年、査読有

藤田益子、トーマス・ウエードと漢語会話テキスト - 『語言自邇集』の言語観 - (二) 『語言自邇集』、『問答篇』、『三合語録』、『清文指要』、『初学指南』の対照、『新潟大学国際センター紀要』、第4号、10-21頁、2008年、査読無

[図書](計1件)

藤田益子、『兒女英雄伝』の言語に関する研究、白帝社、880頁、2010年

[その他]

ホームページ

<http://jglobal.jst.go.jp/public/2009042/200901059127214452>

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤田 益子 (FUJITA ITSUKO)
新潟大学・国際センター・准教授

研究者番号：10284621